贈答句、忌日句について

平山　北舟
（小熊座）

ＮＨＫで放映中の「光る君へ」は、ご存じのように紫式部をヒロインにしたドラマである。彼女の書いた「源氏物語」で驚くのは、男女の応答が和歌でなされていることで、そこには和漢の文物の知識が常識として使われていることだ。当時の上流階級の知的レベルの高さには感服する。

一方、庶民の楽しみとして広まってきた俳句の世界では、お祝い、お悔やみ、お見舞いの挨拶はもちろん、ちょっとした激励・同情にも気楽に贈答句を作ってきた。贈答句といえば、やはり高浜虚子が名手として挙げられる。虚子は慶弔贈答句の難しさについて「慶弔贈答の意味のみが強くでて、四季の諷詠のおろそかな句は、句としてまずい」と言っている。俳句の季題詩性と挨拶性とのバランス感覚の上に成り立っているのが慶弔贈答俳句ということだ。私はこれまで祝い事などに勝手に駄句を送りつけてきたが、今にして思うと、喜びや悲しみの事柄にもたれたり、定型のリズムの心地よさに自分で酔ってしまっていたようで恥ずかしい句ばかりだった。

ところで贈答句に近いものに忌日の句がある。初心の頃、人の亡くなった日が季語になっているのに驚いたものだ。有名な方の死を悼む記憶の留め金として忌日は季語として成り立つ。小説家などには、亡くなった季節に合った、または季節の気分に合った作品名を季語として用いているようだ。太宰治の「桜桃忌」、芥川龍之介の「河童忌」などだ。そこには作家への畏敬の念や追悼の思いがあり、また作家の名前の持つ連想力が季語の主成分となる。しかし「東日本大震災忌」は別として、「みちのく忌」「フクシマ忌」には違和感というか嫌悪感を持ってしまう。そこには俳人の纏め難いことを手早く端的に括りたい、悼むことでより深く考えなければならないことを回避する安易な思いがあるように思う。以前、今井聖が「俳句」の平成俳壇で、〈**月見草咲くウサマビンラディンの忌**〉なる句を特選に選び「政治における正義と倫理は権力が規定する。人はそのことがわかっているから判官びいきが生まれる。月見草はその情を象徴している」と述べていた。これなども「フクシマ忌」同様、如何に俳人に当事者意識がないか、如何に傍観者的であるかを表していると思う。いろいろ主義、主張があることは認めるが、忌日の季語とりわけ特定の人を忌日の季語として立てるとき、わたしはその方に対して皆が、ある種のリスペクトをもっている人を季語として立てるべきと考えている。

令和六年度　宮城県現代俳句協会総会

令和六年三月二十四日、仙台市生涯学習支援センター会議室において開催。会員数九十三名のうち二十三名が参加、事業報告・事業計画等について満場一致で承認された。総会終了後、席題による句会を開催。

第一号議案　令和五年度事業報告

一　定時総会 令和五年三月二十六日　仙台市生涯学習支援センター（二十六名参加）

二　吟行会　令和五年五月二十一日　東北大学片平キャンパス（二十四名参加）

三　研修会・句会　令和五年七月三十日　青葉区中央市民センター（二十名参加）

・講演「俳句旅枕―みちの奥へ」の視座（渡辺誠一郎会長）

四　第三十七回現代俳句東北大会（令和五年九月十七日、福島市コラッセふくしま）

・講演「生きた俳句、生きていく俳句」（神野紗希氏）

五　会報発行（ＮＥＷＳ）四十八号（七月）、四十九号（一月）

第二号議案　令和五年度会計決算・監査報告　下記の通り

第三号議案　令和六年度事業計画案

一　定時総会 令和六年三月二十四日開催予定

二　吟行会　令和六年五月又は六月、十月実施予定

三　研修会・句会　令和六年八月、令和七年二月実施予定

四　第三十八回現代俳句東北大会（山形市）事前投句のみ

五　会報発行（ＮＥＷＳ）五十号（七月）、五十一号（三月）

第四号議案　令和六年度予算案　下記の通り

※次回より、総会欠席者への資料発送は、報告が会報に掲載されますので、経費削減、事務作業軽減のため、省略させていただきます。ご理解のほどよろしくお願い申し上げます。

第三十一回「壺の碑」全国俳句大会

令和六年十月十四日（月）午前十時　多賀城市文化センター

講演　神野紗希氏「声を刻む　俳句の祈り」

当日嘱目吟投句料一五〇〇円

令和５年度収支決算書

宮城県現代俳句協会

令和5年度収支決算書

自R5年 3月 1日
至R5年12月31日

＜収入の部＞　（単位：円）

項目	予算額	決算額	備考
前年度繰越金	429,948	429,948	
地区助成金	180,000	183,200	現代俳句協会，2000円×85名，30-40歳 600円×2名　R4年分2000円×2名 追加助成8000円
総会後句会参加費	30,000	23,000	1000円×23名
吟行会・研修会参加費	30,000	42,000	(1000円/名) 5月吟行会21名、7月研修会21名
雑収入	0	0	
合計	669,948	678,148	

＜支出の部＞　（単位：円）

項目	予算額	決算額	備考
総会費	10,000	9,405	会場費、総会後句会賞品
会報費	100,000	107,464	年2回発行
負担金	10,000	28,020	第37回現代俳句東北大会(福島県)負担金 10000円+(89名×200円)
通信費	25,000	30,307	葉書、切手、郵便代、レターパックなど
事務費	10,000	11,670	インク、コピー、封筒など
吟行会・研修句会補助費	30,000	56,200	5月吟行会、7月研修会
顕彰費	10,000	11,093	大崎俳句大会（R4年、5年分）栖
交通費	15,000	15,200	監査、東北大会参加交通費補助
予備費	459,948	1,720	会場費（幹事会、監査）
次年度繰越金		407,069	
合計	669,948	678,148	

上記決算書の各項につき監査した結果、その内容は適正と認めます。

令和６年 2 月 18 日

監査　中村春

監査　星節子

令和６年度予算案

宮城県現代俳句協会

令和6年度予算案

自R6年 1月 1日
至R6年12月31日

＜収入の部＞　（単位：円）

項目	令和5年度 決算額	令和6年度 予算額	備考
前年度繰越金	429,948	407,069	
地区助成金	183,200	194,000	97名×2000円
総会後句会参加費	23,000	30,000	30名×1000円
吟行会・研修会参加費	42,000	40,000	40名×1000円
雑収入	0	0	
合計	678,148	671,069	

＜支出の部＞　（単位：円）

項目	令和5年度 決算額	令和6年度 予算額	備考
総会費	9,405	10,000	会場費、総会後句会賞品
会報費	107,464	130,000	年2回発行
負担金	28,020	30,000	第38回現代俳句東北大会（山形県）
通信費	30,307	50,000	葉書、切手、レターパック、ヤマトメール便など
事務費	11,670	10,000	インク、コピー、封筒、宛名ラベルなど
吟行会・研修句会補助費	56,200	50,000	年2回、賞品、懇親会補助
顕彰費	11,093	10,000	大崎俳句大会、塩竈ジュニア俳句大会
交通費	15,200	15,000	監査、東北大会参加交通費補助
予備費	1,720	366,069	
次年度繰越金	407,069		
合計	678,148	671,069	

総会（席題「春祭」「馬酔木」）

〈高得点八句〉

十点　廃校の動かぬ時計花馬酔木　丸山千代子
九点　馬酔木咲くかつて女系の大所帯　黒河内玉枝
八点　転勤の我も担ぎ手春祭　伊澤てつを
六点　馬酔木咲く午後開店の古本屋　佐々木和子
六点　焦げ臭き男交じりぬ春祭　鈴木　三山
五点　むずむずと人に会いたし春祭り　大槻　泰介
五点　馬酔木咲く子ども文庫の低き窓　成田　一子
五点　更地ゆく子供神輿や春祭　平山　北舟
　　ひるがへる鳩の一団春祭　坂下　遊馬
　　あしび咲くとなりも人の住まぬ家　庄子　紅子
　　あせび咲く翁も訪ひし天満宮　新藤　綾子
　　春まつり抱かれし稚児の深眠り　星　節子
　　春祭尻目に句座の宵の猪口　小関　桂子
　　花馬酔木姉に口止めされてをり　淺沼眞規子
　　吾に未だ再生ありや馬酔木咲く　大久保和子
　　菜箸を真水に晒し花祭　小田桐妙女
　　墓山の途中にゆさり花馬酔木　日下　節子
　　ひよつとこは隣のじいじ春祭　丸山みづほ
　　花馬酔木雨後の茅屋の主めきて　嶺岸さとし
　　風の匂い水の匂いして花馬酔木　渡辺誠一郎
　　春祭子ども群がる出店かな　紺野みつえ
　　幼子の鼻すじ白く春祭　大坂　宏子
　　床の間の馬酔木の花につぐ一杯　島　松柏
　　今心是にあらずや花馬酔木　髙橋　薫
　　半襟の金平糖柄花馬酔木　本木　朱実

一句一葉

土偶らも言葉に飢えて春の果

大槻　泰介（麦）

丸く口を開いている縄文土偶がある。板状土偶や合掌土偶などだが、それらは何か言葉を発しているように見える。死者への叫びなのか、或いは死者からの伝言なのか。そこには形のない原初の心象を言葉にして発したいという強い思いを感じる。それを言葉への飢えと呼ぶならば、俳人もまた言葉に飢えた存在と言えようか。

万華鏡くるりと海へ雪の華

小村　寿子（陸）

「陸」の仙台に入り、初めての新年会での一句。主宰の天と最高点を頂きました。仙台に転居し、四十日後に東日本大震災に遭遇。震災以降、高層マンションの自宅から、津波が来た海を毎日見るようになりました。ある日、大きい万華鏡を手に海を見ていたら、ハラハラと蔵王からの雪の華が流れ落ちてきました。

木道に人声途切れ草紅葉

齋藤　伸光（滝）

題詠「紅または赤」に対しての出句だが、案外すんなりと出来た一句である。私の俳句実作は、五十代半ばからのかなりの晩学だが、趣味の登山は二十代から今まで細々と続いている。そんな経験からの句であるが、人生どうやら無駄なことは一つもないらしい。選者の片山由美子氏の「静けさも美しさのうち」の評がうれしかった。

天麩羅に揚げてみようか柿若葉

今野　勝正（波）

我が家の柿の木は、私が幼い頃に祖父が互市で求めた苗木を植えてくれたもので樹齢は七十年ほどになる。秋には五百を下らない数の実をつけるので、柿挽ぎもひと仕事である。

渋柿なので皮を剥いて干柿にしたり、焼酎で渋を抜く樽抜きにする。勿論、実りの秋も楽しいが、初夏の若葉は目を楽しませ、心を洗ってくれるのである。

地震禍いたみつ湯婆の水捨つる

小関桂子（青岬）

能登半島地震発生の数日後、湯婆を愛用する息子が「この水もったいないね」と言いながら捨てていた。相槌を打ちながら、東日本大震災時に給水の手伝いをしたときの情景が思い出された。ポリタンクを台車で運ばれる方、マグカップ一個を差し出される方、様々な容器に水を注いだ。連日報道される能登の断水に心が痛む。

左手で書きたる立子春の雨

小野道子（小熊座）

鎌倉虚子立子記念館に、立子が病後左手で書いた〈元旦やいつもの道を母の家〉の句が展示されていました。この書が右手に劣らず美しかったので〈右手でとまごう立子句春の雨〉を作り、句会に提出しました。掲句は高野主宰から添削していただいた句。また、立子の句に会いに行きたいと思います。

しわくちゃな息子の背広紙風船

佐藤詠子（海原・青山俳句工場05）

私が俳句を始めたのは、次男が幼稚園に入った頃でした。周りから「○○君ママ」とばかり呼ばれる日々に焦りがあり、鉛筆と紙だけで想いを綴れる俳句に挑んできました。あれから二十四年…息子二人はもう社会人。同じ目の高さで世の中を見るようになりました。それでも、息子たちの背中を見ると母親の気持ちになるから不思議です。

迷鯨（まひ）湾の墓標となりにけり

島松柏（荒星）

昨年と今年の二月頃、マッコウクジラが大阪湾に迷い込み、身動きが取れぬまま旬日にして死ぬという気の毒な事故があった。海流のためか、シャチに追われたか、餌を追い求めてか、原因は特定できないが、黒い小山のようなその遺体は大阪湾の墓のようで、それは又万博の壮大な無駄の象徴で、終われば解体される巨大な木製リングの墓標をも連想されるものだった。

一句一葉

春日差ここが安置所だったころ

木村菜智（小熊座）

私の初任地は石巻であった。東日本大震災後に赴任したのだが、当時は遺体安置所が至るところにあった。今はすっかり泥のにおいもなく、春の日差しが穏やかに降り注ぐような場所となっていても、「安置所」と呼ばれる場所が確かにここにあったということを、一生忘れることはないと思う。

なんでもない日が好き鳥が渡るだけ

佐藤成之（小熊座）

毎朝スーツに着替え、電車に揺られ職場へ向かう。来年は還暦、延長しても定年まで六年だ。平凡でいい、ほめられなくても偉くなくてもいい、普通がいい。が、小さな願いはある日突然吹き消されてしまう。非力な人間は声を上げることもできず、涙を止めることもできない。途方に暮れる空を鳥が渡るだけだ、しかし命懸けだ。

貝塚に風園児らの水遊

小山都（青岬）

気仙沼に住んで五十年近くなる。気仙沼の名の由来はアイヌ語の「ケセモイ」からで、静かな湾の奥の方といった意味である。今は消滅の可能性の高い都市になってしまった。家の近くに貝塚跡があり隣に保育園がある。縄文時代から続く人々の営みに思いを馳せ、子供達の元気な声が長く続くことを願って止まない。

釣忍昭和の父は笑みわづか

新藤綾子（青岬）

六月は母の日と違って、ひっそりとした行事になってしまった父の日がある。私は父との別れが中学二年生と早かったので思い出は多くない。しかし、父が植物に向い合っている時は優しいおだやかな顔をしていたなあと覚えている。今、私が草花に触れたり、植物園を訪れたりすることが好きなのは、父からの遺伝かも知れない。

干し竿の両端に靴冬うらら
ふたりきり水は百度で沸騰す
紅テント黒南風に立ち滔滔と

川名　まこと（小熊座）

中学一年時の担任は国語の先生だったが、俳句を教わった記憶はない。三十数年後の同窓会に、かの先生をお招きしたら校長職の傍ら地元紙で俳句選者を務めているという。その数年後には、蛇笏賞とやらを受賞された。その重さも知らずに活躍ぶりを映像に残そうと昨年から密着取材を始め、句会に参加したのが運のツキ。半世紀を経て、かの先生が主宰を務める結社で駄句を捻り出す日々が始まった。

草堂に詩人のベッド春の雪
菜の花と海を遠くに波来の碑
ひとり聴く中島みゆき緑の夜

佐々木　清司（荒星）

私と俳句との出会いは、毎月購読していた岩波新書の中の「折々のうた」でした。該博な詩人の大岡信氏の解説による古今の詩歌はとても魅力的で、夭折した芝不器男を知ったのも本書でした。後に、仙台にも在住した不器男を慕う同人誌に結成から参加し、現在も句作を続けております。不器男の故郷である愛媛県の松野町にも訪問し、記念館の見学や地元の方々との交流を行っています

千賀浦見えて茅の輪をくぐりけり
日昇らば郭公のこゑ濁るべう
弁当に蟻払へども払へども

鶴岡　行馬（鷹）

「駅前のちょっとおいしいラーメン屋」。入口にこんなコピーがある店に入った。居酒屋メインのようなのでビールも注文。黒板に「バッハ聴くに踏切鳴りぬ秋の暮」と書いてある。「いいですね」と言ったのがはじまり。作者は小澤實でこれから伸びる人だよとマスターが力説する。マスターも小澤實と同じ鷹の同人だという。その後、店の二階で開かれる句会に参加。昭和六十二年のことだった。

ようこそ、現俳へ。

新会員紹介

（令和６年８月現在）

にぎやかな子らの一列葱坊主
宇宙探査機夏の夜空を深くせり
夏の月砂漠にサメの歯を拾ふ

菊地　美紀（梟）

思いがけず、少し早い退職をする事になった時、自由に使える時間を俳句の教室に通ってみたいと思いました。言葉を楽しむ数人の仲間と極偶に詩など見せ合い、日がな一日、故郷の空や海を眺めて、大きな景に浸る事の多かった自分の大まかさは、俳句との縁が切っ掛けで、身の回りの大切な事を、見る、聞く、思うなど瞬間がとても深い味わいになりました。拙いながら、学んでいきたいです。

６Ｐチーズ一個の体積建国日
選局中にロシア語混じる春嵐
瞬きのごときくちづけ麦の秋

小川　真理子（梟）

誕生日に母から贈られた歳時記。読めない漢字、知らない言葉、季節のずれ、そのなにもかもに惹かれ読み耽りました。つつましくささやかな暮らしそのものが季語の宝庫と気付いてから、家事も子育ても観察と鑑賞の対象となり、日記の隅に俳句らしきものを書きつけるようになっていました。以来四十数年、師と友に恵まれ、清潔な街に住み、安住せぬよう心掛けて俳句に向かっております。

■謹悼

京武　久美（雪天・海原・黒艦隊）令和五年七月六日逝去　享年八十七歳
高藤　定子（風景）　令和五年七月十九日逝去　享年九十九歳

■慶祝

第四十八回宮城県俳句賞　平山　北舟
第二回楽園賞　奥村　京水
第十五回田中裕明賞　浅川　芳直
第四十二回鷹新葉賞　鶴岡　行馬

塩竈吟行

令和六年七月十四日（日）

場所　本塩竈駅周辺（塩竈市）
（直会横丁、湯屋跡、旧ゑびや旅館、法連寺跡、芭蕉止宿の地、勝画楼ほか）

句会場　塩竈市民交流センター 遊ホール

参加者　二十一名（欠席投句一名）　三句出し、五句の互選

〈高得点八句〉

七点　旧ゑびや旅館金魚は今を生く　淺沼眞規子
六点　神竈の錆の歳月朝曇　平山　北舟
六点　台座のみ残る灯台蟻走る　星　節子
五点　藻塩焼神事小声の裏事情　小関　桂子
四点　祭禮の幟は高く土用東風　川名まこと
四点　灯台は未完のままに夏の草　坂下　遊馬
四点　七月や芭蕉宿りし跡に佇つ　佐々木和子
四点　釜に神しおからとんぼの時々来　本木　朱実

夏詣参道の坂に表裏　伊澤てつを
梅雨晴や車箪笥に写る空　黒河内玉枝
ぎいと鳴る長き幟に熱き風　小村　寿子
鬼房の句碑裏に棲む夏の闇　嶺岸さとし
神釜の水はあふれず夏祭　渡辺誠一郎
釜神の太き走り根梅雨の空　上田由美子
盗人は塩釜さへも竹落葉　大久保和子
蟻の列勝画楼へと参じけり　鈴木　三山
樹の陰の涼風刹那勝画楼　赤間マリ子
空梅雨やゑびやの欄干に芸妓　大坂　宏子
梅雨の明け闇市跡の白さかな　大槻　泰介
七曲先の先まで木下闇　菊地　幸子
露草を跨ぎ後からついてゆく　庄子　紅子

盛りだくさんの吟行会

黒河内玉枝
（小熊座）

七月十四日十時半、塩竈みなと祭前夜祭の賑わいの中、本塩釜駅に二十名が集合。渡辺誠一郎会長から塩竈の古地図と最新の観光案内、団扇等の入った資料を頂き、吟行地へと向かいました。

東日本大震災により被災した駅前の「闇市」は「直会横丁」に生まれ変わり、路地には新しい店舗や若者の人気となりそうなスポット（建設中）等きれいな佇まいを見せていました。渡辺会長の地元ならではの案内により、横丁の謂れや裏話、店の人気メニューに至るまで、変わりつつある塩竈の様子を聞きながら御釜神社に着きました。

ここからは江戸時代にタイムスリップ。「鹽竈一宮大明神」と書かれた江戸時代の古地図と現在地を確かめながら、芭蕉が訪れたとされる湯屋跡、旧ゑびや旅館、法蓮寺跡、芭蕉止宿の地があったとされる場所、又今まで立ち寄る機会のなかった法蓮寺書院の勝画楼を訪ね、当時の賑わいに思いを馳せました。

旧ゑびや旅館では、虫食い穴そのままの長押に施された螺鈿細工に小さな帆掛け舟や月が見られ、当時の町人文化のレベルの高さと粋な遊び心、余裕を感じました。初めての勝画楼では伊達綱村公と鹽竈神社の三柱の社殿の意味、又かつて青葉城にあったと言われる懸造りを目にして、昔から仙台市民が「鹽竈さま」と呼んでいた塩竈の歴史が分かりました。

吟行後、句会会場の塩竈市民交流センター遊ホールに移動。道中に出会った様々の事柄に、頭の中の整理がつかぬまま投句の締切。配付された清記用紙には、共通の体験をその人らしく切り取って詠まれた秀句が出揃ったため、選句の点数が分かれました。披講の後、合評の時間が持たれ、選句理由や感想、副詞の使い方等を話し合いました。このような機会はなかなか経験できないのでとても勉強になり、もっと皆さんのお話を聴きたいと思いましたが、あっという間に終了の時間が来てしまいました。

句会終了後、会場に併設している塩竈市民図書館を見学。低書架と色合いに、嘗ての学校の図書室のような居心地の良さを感じ、ほのぼのとした思いをしました。

梅雨の時期でしたが、曇り空となっても最後まで雨に降られることなく、盛りだくさんの充実した吟行会でした。

土見敬志郎『岬の木』（朔出版）

人間対自然の相剋の化身

浅川　芳直
（駒草・むじな）

本書は著者の第二句集で、平成十四年から令和四年までの四五七句を収める。序文で高野ムツオは昭和四十二年、著者が「駒草」で一力五郎賞を受けたころの眩しい印象を語っているが、当時の敬志郎は「駒草」二十句競詠で二年連続の一位を獲得し、作家性を確立し始めた頃だったようだ。「駒草」昭和四十二年十一号から抜いてみよう。〈**蝶渉るかぎり輝き海の空**〉〈**沖より漁夫冬暁となり漕げり**〉（五郎賞受賞作）、〈**少年の胸厚みもつ山五月**〉〈**ブナ山を霧曲りては這い来る**〉（第十二回二十句競詠一席「無題」）。塩竈の海に憑かれた写実から、ぐっと沈潜した山の景まで。みどり女は「ものと影の調和をとった作品」と評したが、いずれも自然の重みを全身で受け止めて押し返すような句作りで、そこに生じる相剋をみどり女は「ものと影の調和」と言ったのではないか。

さて本書は、東日本大震災の句を含む。自然が牙を剝いて人間に向かった津波は、著者の故郷寒風沢を襲った。平成二十三年の句には〈**悲しみの陽炎であり沖つ石**〉〈**縄文に還れと春の津波かな**〉〈**父の日の瓦礫の底に暮れてゐる**〉。自然に押しつぶされるような叫びの句群だが、かつての自然児敬志郎の詩魂はけっしてそこに留まらない。やがて〈**秋風が水平線に乗つて来る**〉〈**海の陽を渾身として枯蟷螂**〉といった、悲しみの先にある自然の受容が基調を為し始める。言うなれば作者は「人間対自然の相剋の化身」とでも言うべき存在となって、新たな作品世界を拓きはじめる。

もちろん〈**蒼沖の光を溜めし冬菜畑**〉〈**卓上の檸檬一個と暮れてゐる**〉〈**夜濯ぎの水が銀河と光り合ふ**〉のような甘やかな自然との交歓もあり、本書にこの種の佳句は少なくない。だがこの句集後半の基調はむしろ〈**冬木立即身仏のごとくあり**〉のように、自然に憑かれるのではなく厳然たる眼差しを向けて立つ詩人の生きざまだ。

白南風やわれ一本の岬の木

最終章に置かれた表題句。一見自然に取り込まれ同化してしまったかのような書きぶりながら、同化しつつも己を失わない。強烈な「われ一本」は、まさに人間対自然の相剋の化身であり、敬志郎を象徴する一句となった。

浅川芳直『夜景の奥』（東京四季出版）

俳句を信じる

成田　一子（滝）

浅川芳直氏は平成四年宮城県名取市生まれ。「駒草」同人。東北の若手俳人を中心とする「むじな」の創刊者であり、近頃は俳句四季新人賞、宮城県芸術選奨新人賞、芝不器男俳句新人賞対馬康子奨励賞を立て続けに受賞。現在「河北新報」の「秀句の泉」の執筆者のひとりとしてもなじみ深い。俳句作品と散文の両輪で活躍中の若手トップランナーである。

待望の第一句集、やはり氏の根底をなすのは「駒草」阿部みどり女の写生であることを実感する。俳句形式への深い信頼に基づいた作品は、初めて読む者にもどこか懐かしさを伴う心地よさを与えるだろう。句集のタイトル句でもある〈**雪となる夜景の奥の雪の山**〉は、「南に大年寺山、北に七ツ森」の大学研究室の窓からの眺めだという。夜景の奥にある雪の山は、都会の人にとっては淡い憧れとして映るかもしれない。言葉に負担をかけず、透徹した写生にて生みだされる句群。〈**七草粥箸につきくるひかりあり**〉〈**ありの余る日向としての冬田かな**〉〈**初雪のこぼれくる夜の広さかな**〉。前書に地名が多いのは、同じ宮城県の俳人佐藤鬼房の句集にも通じるか。〈**栗駒山や蓮見の水脈の濁りたつ**〉（伊豆沼）、〈**雪解風陸羽東線来る気配**〉など土地ならではの「匂い」を感じるものが多い。

集中、私が最も惹かれたのが〈**あかるくてからつぽしぼり器のレモン**〉の一句。句集の中では、やや異彩を放つ作品であるが、この「あかるくてからつぽ」を捉えたまなざしの根底には、明るくて空虚なものに対する作者の若干の憧れと、乾いた目線を感じる。特に十代の若者などは、根拠のない自信とともにこの虚ろなる明るさが見られることがある。ふだんから自己の内面や周囲への洞察がなければ、この奇妙な黄の明るさに目がいかないのではないか。〈**吸殻の火や涼風のマーケット**〉でもレモンの搾りかす同様に、「吸殻」という無用のものを描く。素材そのものが他の文芸では主役はおろか脇役にもなりにくいものであるが、客観の眼を通してそれらに命を吹き込んでいる。作品を生みだす痛みはどんな表現者にもあるかと思うが、浅川氏の手から差し出される十七音はその格闘を感じさせない。やはり氏の中に詩型への信頼、俳句を信じる心が根強くあるからだろう。

編集室から

◆コロナ禍明けから一年を超え、様々な再会を果たされていると思う。空間を共にする対面の交流はより視野を広げてくれる。六月には、私が運営する仙臺俳句会（超結社句会）にて、楽園主宰・堀田季何氏をお迎えし、仙台の街なかで吟行を開催。多忙を極められても、氏の言語芸術のさらなる高みを目指す姿勢に励まされた。

◆七月、宮城県詩人会事務局オフィス汐後援の市民公開講座ポエトリー・カフェみやぎにて「俳句という魅惑の短詩型文学」と題して講演をする機会を得た。参加者は詩人が多く、講演後のご感想やご質問から、詩の言葉が生まれる源泉が見えてくる思いがした。（小田島渚）

photo俳句

七夕を見せずに母を逝かせけり　淺沼眞規子

（表紙の写真／仙台七夕祭）

日本現代詩歌文学館常設展「インテリアと詩歌」開催記念企画作品募集

俳句部門選者　小田島渚　投句無料

締切　令和六年十一月二十九日（金）（必着）

インテリアを題材にした俳句（新作・未発表）

（詳細は同館ホームページ。オンライン投句可）

発行所　宮城県現代俳句協会　令和六年九月十五日発行
発行人　渡辺誠一郎　編集部　坂下遊馬、小田島渚
事務局　〒九八九―二三五一　宮城県亘理郡亘理町北新町二二―一三
坂下遊馬　方
電話　〇九〇―二九八二―七二三〇
メールアドレス　miyagikengh@gmail.com